



TITLE:

Vergleichende Untersuchungen über depressive Erkrankungen in Japan und in Deutschland(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Kimura, Bin

CITATION:

Kimura, Bin. Vergleichende Untersuchungen über depressive Erkrankungen in Japan und in Deutschland. 京都大学, 1964, 医学博士

ISSUE DATE:

1964-12-22

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211383>

RIGHT:

【148】

氏 名	木 村 敏 き むら びん
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 163 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 12 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Vergleichende Untersuchungen über depressive Erkrankungen in Japan und in Deutschland (日独両国におけるうつ病の比較研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 村 上 仁 教 授 前川孫二郎 教 授 三 宅 儀

論 文 内 容 の 要 旨

精神疾患はその病者の属する文化圏の特性と密接な関係を有し、同一疾患の異った文化圏における出現様式の異同を知ることは、その疾患の症候論、ひいては疾患の本態を理解する上に不可欠のことであるにもかかわらず、従来主として言語的制約のため、諸外国と日本との間のこの種の比較研究はほとんど未開拓であった。著者は1961年より2年間にわたるドイツ滞在期間中にミュンヘン大学精神科に入院中の100余名のうつ病患者を自ら診察し、これを最近数年間に京大精神科に入院した同じく100余名のうつ病患者と比較考察して、若干の興味ある知見を得た。

単に日独両国の大学病院精神科入院患者総数中うつ病の占める比率を比較すると、ドイツのそれは日本のそれよりはるかに高率である。しかしその際、(1) 両国の大学病院における診療制度の相違、ことに日本における外来患者の占める比重、(2) 日本人が一般にヨーロッパ人に比し、軽度のうつ状態を病氣とみなさない傾向があること、つまり日本人の「うつ病に対する許容性」、(3) うつ病になりやすいのは男性より女性であるが、その女性に対するベッド数が男性のそれよりも少ないこと、また女性一般の社会的地位の低さ、などの諸点を考慮に入れるならば、両国におけるうつ病の発生率は統計にあらわれた表面的な差よりはるかに接近した数値を示すものと考えられる。

罪責感とうつ病の主要症状の一つであり、これは従来、患者の宗教、伝承的神話との関連においてとられて来た。したがってまた、キリスト教とは根本的に異なる日本の宗教、ないしは日本の神話に罪悪感の概念が不明確なため、従来日本における罪責感とはヨーロッパ諸国に比して稀であるかのごとき考察がなされてきた。著者の研究によればしかしながら、日独両国のうつ病患者の間に罪責感の出現の頻度になんらの差異も見出されなかった。むしろ著しい差異の見出されたのは罪責感の内容についてであって、ことに、誰に対して済まないと思うか、という罪の対象については数々の興味深い相違が認められた。たとえば、「両親に済まぬ」とするものが日本に多く、これに反して「子供に済まぬ、子供の教育を誤った」とするものがドイツに多かったが、これは両国の家庭生活のあり方の根本的な相違をそのまま反映したものであ

る。また「職場の同僚に済まぬ」とするものが、日本にのみ見出されたが、これは日本人特有の社会的連帯意識・個人の確立の不充分さに由来するものとして解釈される。

貧困妄想に関しては両国間に特に差異を認めなかった。心気症については、ドイツにやや多く見出されたが、これは生死の問題に対する両国民の考え方の差を反映するもので、次に述べる自殺の問題とも関連する。

自殺念慮を有する患者の数は両国民間にはほとんど差を認めなかったのに反し、自殺を実際に企図した者の数は日本において圧倒的に多い。ドイツ人の場合、自殺は苦しい現実からの逃避として一方で夢みられながら、他面怖るべきものとして遠ざけられているのに対し、日本人は罪からの浄化としてのわが国古来の「死の美観」がうつ病の中にまで持ち込まれ、自殺を考える日本人患者はすでに半ば自殺を決意しているとさえ言える。この「死への親近感」が自殺企図の数を増しているものと考えられる。

論文審査の結果の要旨

同一疾患であっても、ことなつた文化圏においてはその症状の出現様式に相違があることは当然であつて、アメリカを中心として trans-cultural な観点からの研究はじゅうらいもあるが、日本とヨーロッパとの精神病の症状の相違について論じたものは、主として言語的制約のため、ほとんど存在しない。

木村は1961年より2年間にわたるドイツ滞在中に、ミュンヘン大学精神科に入院中の100余名のうつ病患者を自から診察し、これを最近数年間に京大精神科に入院した同じく100余名のうつ病患者と比較し、若干の興味ある知見を得た。

まず日独両国のうつ病患者の頻度には著しい差がないことを明らかにし、ついで両国のうつ病患者の症状のうち、罪責感の頻度も両国の宗教事情の相違にもかかわらず大差がないこと、ただしその内容には両国の社会的連帯意識のちがいによる顕著な相違があることをたしかめた。また自殺念慮の頻度も両国間にほとんど相違がないが、自殺を現実企図するものは日本において圧倒的に多数であることを認め、これを両国民の死に対する見方のちがいがうつ病の症状にも表現されているものとした。

以上本論文はじゅうらい未開拓の問題を実証的に解明したもので、学術上有益であり医学博士の学位論文として価値あるものと認める。